

2022年11月13日佐土原キリスト教会礼拝説教

聖書箇所：ルカ福音書24章13～35節

説教題：終わりではない

会堂での礼拝が始まり、教会も復活したような気持ちがします。また新しい気持ちで、皆で教会の歩みを造って行きたいと願います。そのような意味で、今朝は、私達の希望についても一度確認して、その希望を胸に、新しい歩みをしたいと願ひ、復活の記事を御一緒に学びたいと思いました。

さて、以前もお話ししたかも知れませんが…。又吉直樹というお笑い芸人の方がおられます。今は芥川賞作家としての方が有名です。親御さんはクリスチャンで、彼もかつて教会学校に行っていたそうです。その彼が、一昨年でしたか近畿大学の卒業式で、20分程のスピーチをしています。最後の部分で語っていたのは次のような言葉でした。「辛いこと、しんどいことが続く時は、これは次に良いことが起こる予兆だと考えるようにしている。水も喉が渇いている時に飲んだ方が美味しいように、しんどいことがあったら、必ず楽しさが倍増するようなことがあるんだって信じるようにしている。『バッドエンド(悪い終わり)はない。僕達は途中だ』というのが実感です。しんどい夜の先に、続きがある、そのことを思っただけだと思ひます」。親御さんの影響でしょうか、聖書に、もっといって「主の復活」に、通じるスピーチのように感じながら聞きました。

## 1：内容

今朝の箇所は「エマオ途上」と呼ばれる箇所です。この記事は「聖書の中で最も美しい記事」と言われます。イエスの十字架から2日後、日曜の午後、エルサレムからエマオという村に向かって歩いて行く2人の弟子がいました。イエスの弟子でしたが、十字架に直面して失望し、何もかも捨てて故郷に帰ろうとしていました。彼らには近寄って来られたイエス様が分かりません。イエスは彼らに聞かれます。「ふたりで話し合っているその話は、何のことですか」(17)。19～21節にある彼らの言葉は暗いです。「あんなに望みを掛けていたのに、結局、彼は死んでしまった。全ては虚しく終わった」、そんな絶望感が伝わって来ます。彼らだけではない。「この人が我々を支配者ローマの圧制から解放してくれる、この人について行けば良い」、弟子達はそう思ってイエスについて来たのです。

ところが、その人が、権力者に逮捕され、鞭打たれ、十字架に掛けられてしまいます。その凄まじい現実の中で、彼らはイエスを裏切って逃げてしまうのです。隠れ家に集まって恐ろしい時をやり過ごすのが精一杯でした。あるいはこの2人のように、故郷に逃げ帰るのが精一杯だったのです。ここにおいてイエスという宗教家がいたことも、イエスを中心に活動していた集団があったことも、歴史の彼方に消えてしまうはずでした。何もかも終わりのはずでした。

ところが2人の弟子がイエス様と食事の席についた時、彼らの目は開かれるのです。イエスの手に釘の跡を見たのかも知れない。彼らも信じられなかった。でも確かに目の前にイエス様がいたのです。そして彼らは「イエスの復活」という事実を理解し始めるのです。理解した時、どうしたのか。(33節)「すぐさまふたりは立って、エルサレムに戻(る)」(33)のです。エマオからエルサレムまでは11kmです。復活のイエス様との出会いによって彼らの心は変えられました。まだ明るい道を暗い気持ちで歩いて来た2人でした。しかし今度は、暗い夜道を希望に支えられて歩くのです。信仰生活を象徴しています。どんな暗闇の中でも、神から来る希望に支えられて夜明けに向かって歩くのが信仰生活です。とにかく彼らは、自分達の経験したことを

仲間には知らせてくたせようがなかつた。これが、弟子達に後に復活のイエス様のことを人々に宣べ伝えて行くエネルギーなのです。

## 2: 教え

では、この箇所は、何を教えるのでしょうか。目が開かれる前の彼らはこう言っています。(19～23 節の抜粋)「…祭司長や指導者たちは、この方を…十字架につけた…その事があつてから三日目になります…仲間の…女たちは朝早く墓に行ってみました、イエスのからだが見当たらない…御使いたちがイエスは生きておられると告げた、と言うのです…」(19～23)。彼らは、御使いが「イエスは生きています」と告げたことを知っているのです。墓が空だったことも聞いています。それなのに目の前のイエス様が分からないのです。どうして彼らにはイエス様が分からなかったのでしょうか。イエス様の方にも、以前とは違う何かがあつたのかも知れません。しかし彼らの方も、十字架の衝撃、あまりの失望、落胆で、反応出来ない、イエス様の出現を受け止めることは出来ないのです。しかしその一番の理由をイエスは、(25 節)「預言者たちの言つたすべてを信じない、心の鈍い人たち」(25)と言われる。つまり「聖書の言葉に対して鈍い、聖書の言葉を信じていないから復活を受け止めることが出来ないのだ」と言われたのです。だからイエスは、彼らにご自身をお示しになるのに「私だよ、見てごらん。手には釘の跡があるだろう。脇には槍の跡があるだろう」という方法を取られなかつた。そうではなく(27 節)「聖書全体の中で、ご自分について書いてある事がらを彼らに説き明かされた」(27)のです。神が天地万物をお造りになってすぐに人間の罪の歴史が始まりますが、神はその人間を救うためにひたすら努力して来られた、それが聖書の大筋です。そこには「神が犠牲を払って人を救う」という基調があるのです。その救いの御業の頂点にイエスの十字架があるのです。しかしその十字架にぶつかつた時、弟子達は、神の御旨が見えなくなつて絶望してしまつたのです。しかしイエス様は(26 節)「キリスト(救い主)は、必ず…苦しみを受けて、それから…栄光にはいるはずではなかつた…か」(26)、それが「聖書に預言されていたことではなかつたか」と諭されたのです。それが「イザヤ書 53 章」等の預言です。そして実際イエスは、私達と神を遮る私達の罪の罰を、十字架で始末して下さり、私達が、罪赦されて神の御腕の中に飛び込んで行くことが出来るように、やがて神の御腕に抱かれて天国へ入つて行けるように、救いの道(橋)を造つて下さつたのです。そのためにイエス様は十字架で死なれました。

しかし、十字架で終わりではなかつたのです。神様の御心を為し終えたイエス様を、神様は甦らせたのです。それが神の計画でした。それによつて私達には「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです」(ヨハネ 11:25)というイエス様の言葉の確かさ、私達に与えられている救いの確かさが分かつたのです。

## 3: メッセージ

この箇所から 2 つのメッセージを語られるように思います。1 つは「物語を終わりにしてはいけない、終わりにしなくて良い」ということです。この 2 人はイエスの十字架に直面して「もう終わりだ、何もかも終わった」と思つたのです。弟子達の全部がそう思つたのです。「イエス様の墓が空だった」というニュースも、「天使が『イエスは生きておられる』と語つた」というニュースも、彼らを立ち上がらせることは出来なかつた、失望の極みだったのです。私は、自分が急性鬱で入院した時のことを思います。失望に打ちのめされて、何と云つても励まされても立ち上がることは出来ませんでした。彼らもそうだった。しかし、それは彼らの視点から見た

話だった。神様の視点では、イエス様は、苦しみ後に栄光に入ることになっていたのです。出来事の意味も、結末も、全然違うものだったのです。

この物語は「私達に起こることも同じではないか」と語るのです。私達の人生も、順風満帆な時だけではありません。時には悩みがあり、苦しみがあり、悲しみがあり、途方に暮れたり、落胆したり、そんなことが多いのです。その時、私達は先が見えなくなって、神の御心が見えなくなって失望するのです。しかし、それも人間の視点から見た話なのです。神の視点には違うものが映っているのです。私は入院した時、又吉さんが言うように「これにも続きがある」等ということは、考えることも出来ませんでした。しかし、それは私の視点でした。神様にはご計画があって、やがてその辛い出来事を感謝出来る、そのような結末に導こうとしておられたのです。実際、今もあの出来事が私の信仰を支えているのです。私達が神の御腕の中にあるなら、どんなに失望しようとも、失望は失望で終わらない。そこで物語を終わりにしなくて良い。私達が「終わった」と思うところ、しかし神様の方では、その物語は終わっていない、そこにも神の御旨は流れているのです。神に在っては、十字架の苦難は、復活の喜びに繋がっているのです。「あなたの物語、いや、神の物語を、勝手に終わりにするな」と、神は言われるのです。

先週のお話しした話ですが、肝心のことを言い忘れました。ある姉妹が、ご自分が生まれた時、お母さんの産後の肥立ちが悪いというのでしょうか、お母さんはそのまま入院しなければならなくなられ、やがて亡くなってしまわれました。その姉妹は、お母さんに会ったことがないのです。やがてその方は成長して、自分の田舎の村を出て町に行き、キリスト教に出会って、洗礼を受けてクリスチャンになりました。彼女は、家族に信仰を伝えたいと思いましたが、「あんな田舎に住んでいる家族がキリスト教を信じるはずがない」と絶望的な気分だったのです。しかしそんな時、1つの事実を知るのです。自分を産んで亡くなったお母さんは、病院で宣教師に導かれて信仰を持ち、病床で洗礼を受けていたことが分かったのです。言葉に出来ないほどの喜びだったそうです。なぜでしょうか。天国で、まだ見ぬお母さんに会えるからです。そしてその事実が分かった時、田舎に住んでいる兄弟が、1人、1人と救われて行ったということでした。お母さんが亡くなったところで物語は終わっていなかったのです。「終わりではない」、「その神の視点に生きて行きなさい」と、この箇所は語るのです。

もう1つ、この箇所のメッセージは「甦ったイエス・キリストが共におられる」ということです。2人は食事の席で目が開け、イエス様だと分かりました。彼らはそこまで気がつかなかった。しかしイエスは、彼らと共におられたのです。そして31節に「それで、彼らの目が開かれ、イエスだとわかった。するとイエスは、彼らには見えなくなった」(31)とあります。「イエスは、彼らには見えなくなった」、しかし「イエスはいなくなった」とは書いてないのです。見えなくても、イエス様は、彼らと共にいて下さるのです。そしてこの時から、イエス様を信じる者とイエス様が共に歩いて下さる、そのような祝福が始まったのです。教会は、その信仰に生きて来たのです。2人の弟子と歩いて下さったイエス様が、今も私達と共に歩いて下さっている、そのことを語るが故に、この物語は、誰にとっても「美しい物語」なのです。

申しあげたように、私達の人生にも、落胆の道を日没に向かって歩いているように感じる時があるのです。しかし、そのような時にも、実はイエス様が共にいて下さり、私達を支え、励まし、夜明けに向かって歩み出せるようにして下さるのです。「足跡」という詩があります。「ある夜、わたしは夢を見た。わたしは、主と共に、なぎさを歩いていた。暗い夜空に、これまでのわたしの人生が映し出された。どの光景にも、砂の上にふたりのあしあとが残されていた。

一つはわたしのあしあと、もう一つは主のあしあとであった。これまでの人生の最後の光景が映し出された時、わたしは、砂の上のあしあとに目を留めた。そこには一つのあしあとしかなかった。わたしの人生でいちばんつらく、悲しい時であった。このことがいつもわたしの心を乱していたので、わたしはその悩みについて主にお尋ねした。『主よ。わたしがあなたに従うと決心したとき、あなたは、すべての道において、わたしと共に歩み、わたしと語り合ってくださいと約束されました。それなのに、わたしの人生のいちばんつらい時、ひとりのあしあとしかなかったのです。いちばんあなたを必要とした時に、あなたが、なぜ、わたしを捨てられたのか、わたしにはわかりません』。主はささやかれた。『わたしの大切な子よ。わたしはあなたを愛している。あなたを決して捨てたりはしない。ましてや、苦しみや試みの時に。あしあとが一つだった時、わたしはあなたを背負って歩いていた』(マーガレット・パワーズ)。2人の弟子には分からなかったけど、イエスが彼らと一緒に歩いておられたのと同じです。イエス様が私と共に歩いて下さった。歩けないような時には、背負ってでも共に歩いて下さった。作者は、そのことを語らずにおれなくて、この詩を書いたのです。それがイエス様を信じる者を包んでいる現実なのです。

今日、3月に天にお帰りになった兄弟のご遺族の方々が参加して下さっています。兄弟は、昨年、私が鬱だった時、電話で「先生、人生を謳歌して下さいよ」と言って下さいました。それは私にとって、本当に大きな慰めでした。心が軽くなったような気がしました。そして今も、その言葉に生きる糧を頂いています。しかしそれは、ご自身が様々な苦難を経験され、そこを乗り越えて来られた方だからこそ語って下さった重い言葉だと感じています。そしてまた「先生、イエス様がおられるじゃないですか」という言葉としても響いて来るのです。兄弟の人生も、イエス様と共に歩かれた人生だったのだな、としみじみ思うのです。6年前に先に天にお帰りになられた姉妹は、ご結婚式でしたか、「神様の恵みを忘れたらいかんよ」と親戚の方が言われた言葉を、涙を流して何度も話して下さいました。そして私が忘れられないのは、もう召天される最後の日々でした、ベッドの上で讚美歌を力を尽くして歌われたお姿でした。私は、姉妹のお心に主がおられることを強烈に感じました。そのようにお2人の人生には、大切なお互い、ご家族と共に、主がいつも共におられたことを思うのです。

そしてそれは、地上を生きる時だけのことではない。遠藤周作の「侍」という歴史小説があります。仙台藩の長谷倉という侍が藩の命令でローマに行き、クリスチャンになって日本に帰って来ます。しかし帰って来た時はキリスト教迫害下で、長谷倉は死罪になります。彼にずっとつき従って来た下男が、処刑場で「ここから先はもうお供は出来ない」という場所まで来た時、長谷倉に向かって叫びます。「ここから先はあの方が、あの方が一緒に行かれます」。私達は、どんなに愛していても、死を越えて一緒に行くことは出来ません。しかし死から甦ったイエス様は、生も死も支配しておられる方です。兄弟も、姉妹も、イエス様と一緒に、死を越えて、天国に歩いて行かれたことでしょう。だから今、天で礼拝しておられます。

イエス様は、甦られました。今生きておられます。誰でも、イエス様を心に迎えるなら、イエス様を通して神様に受け入れられ、御手の中で生きて行くことが出来るようになりました。どんな時にも、天国に至るまで、イエス様が共に歩いて下さるようになりました。これが、私達に与えられている希望です。復活を感謝しましょう。